

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24520435

研究課題名(和文) 状態性述語の総合的研究：日本語形容詞類と繫辞の形態・統語・意味

研究課題名(英文) An integrated study of stative predicates: Morphology, syntax and semantics of Japanese adjectivals and copula

研究代表者

漆原 朗子 (Urushibara, Saeko)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：00264987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語形容詞類と繫辞の形態・統語・意味的特性を中心に状態性述語を総合的に研究した。その一端は日本英語学会第31回大会(2013年11月9日(土)福岡大学)ワークショップ「状態性述語の形態・統語・意味をめぐって」にて発表した。また、研究代表者の漆原は本研究の一部も含む編著書『形態論』(朝倉書店、2016年)を出版、連携研究者の岸本も同書の第2章を担当すると共に、国内外学術誌に論文が掲載された。連携研究者の多田は国立国語研究所等で関連研究を発表した。これらの成果を基に2017～2021年度基盤研究(C)に「分散形態論の批判的検証：日本語オノマトペの述語化と英語の転換に着目して」を申請、採択された。

研究成果の概要(英文)：An integrated study of stative predicates was conducted focusing on the morphological, syntactic and semantic properties of Japanese adjectivals and copula. Part of the research was presented in the workshop "On the morphology, syntax and semantics of stative predicates" at the 31st Conference of the English Linguistics Society of Japan, held on November 9, 2013 at Fukuoka University. The principal investigator Urushibara published "Morphology" from Asakura Shoten in 2016, where some of the outcome of this study was included. Kishimoto, a collaborating researcher contributed to the above book as well as publishing domestic and international journals. Tada, another collaborating researcher, made presentations of the relevant research at the National Institute for Japanese Language and Linguistics and other institutions. Based on the outcome of the current study, Urushibara applied for the 2017-2021 Grant-in-Aid for scientific research and has been accepted.

研究分野：理論言語学(形態統語論)

キーワード：形態論 統語論 意味論 状態性述語 形容詞 繫辞 否定辞 オノマトペ

1. 研究開始当初の背景

状態性(stativity)は通言語的には様々な範疇として実現されうるが、典型的には名詞・形容詞類である(典型的には事象(動作・行為・状態変化等)を表す動詞が状態を表す際には特に状態動詞(stative verbs)と呼ばれるのもそのためである)。本研究はそれら状態動詞も含めた状態述語(stative predicates)を研究対象とする。

状態述語の研究、特にその形態統語的側面の分析は、典型的な動詞研究に比べると量も少なく、したがって体系的な研究も多くはなかった。一方で、意味論においては、早くは Kuroda の 60 年代の研究、また 1980 年代から 1990 年代にかけ、Kratzer(1989)、Diesing(1992)等の一連の研究により、いわゆる individual-level predicates と stage-level predicates の峻別において言及されてきた。また、Déchaine(1993)は述語を通範疇的に分析、その統語的特性を分析している。

研究代表者である漆原は博士論文(Urushibara(1994))以来、日本語の形容詞類を中心とする状態性述語に継続的に関心を抱き、論文・学会報告等を通じて他の研究者に発信、有益なコメント等に基づき、展開を進めている。その直接的成果は日本語感情形容詞に関する科学研究費補助金研究である。

状態性述語、特に形容詞類の研究は不可避免的に相(aspect)・法(modality)の研究にも展開する。そのため、同時進行的に英語の過去分詞に関する研究(科学研究費補助金研究)、進行相と完了相に関する英語・東京方言・北部九州方言の比較研究(科学研究費補助金研究)などを行ってきた。さらに、最近では「まい」などの法要素の形態統語的研究も行っている。

一方、2000 年代に入り、形容詞類の研究に関する研究が多く出現してきている(Baker(2004)、McNally and Kennedy(2008)、Cinque(2010)など)。それらと並行するように、日本言語学会の 2008 年度大会では会長・影山 太郎氏による属性叙述に関する基調講演が行われ、状態性への関心があらためて高まってきた。その結果、日本英語学会の 2011 年度大会スチューデントワークショップでも名詞類に関するワークショップが企画され、日本言語学会 2011 年度大会では活用に関するシンポジウムが開催されるなど、学界においても、注目度は高くなっている。

しかしながら、この動向においても、次の 3 点の課題がある。まず、状態述語の意味的研究はそれなりに多く、また、Urushibara(1994)、Nishiyama(1997)など、形態統語論および形態論的アプローチは見られるものの、形態・統語・意味をそれらのインターフェイスも視野に入れた体系的かつ包括的研究は行われていない。

第二に、多くの印欧語では形態的に明示的な繫辞(コピュラ)についても、日本語のそ

れについての同定は明確にはされていない。生成文法の枠組みでも、1960 年代以来の一連の日本語研究の中で、統語的分析の一環として繫辞の形式が規定されることはあっても(例えば「学生である人」「学生の人」はそれぞれ時制のある繫辞と時制のない繫辞など)、形容詞やいわゆる形容動詞については、Urushibara(1994)、Nishiyama(1997)の提案はあるものの、明確な結論には至っていない。

最後に、事象を表す述語(典型的な動詞)でも、相要素(例えば結果状態を表す「ている」)や法要素(例えば推量の「だろう」や否定推量の「まい」、否定辞「ない」等)と共起すると状態的([+stative])になる傾向があることは通言語的にも知られているが、それらの統語的分析と意味解釈の対応については、明示的に示されているとは言い難い。

そこで、漆原は、岸本 秀樹(神戸大学)と多田 浩章(福岡大学)と連携して本研究を申請することとした。具体的には、岸本が継続的に行ってきた否定辞に関する統語的研究から多くを得られることが予測された。特に、否定辞「ない」については、動詞に接続する場合と形容詞に接続する場合では音韻・形態・統語的に異なった振舞いをする事は知られているが、そのことは繫辞の同定に関しても重要な点であり、岸本も最新の研究で分析を進めていた。

また、多田は前述の individual/stage の区別を敷衍し、状態の記述に関する恒常的属性と一時的状態/知覚に関し、統語と意味の対応について研究を進めていた。

漆原がその専門として継続的に行ってきた状態述語(特に形容詞類)の形態統語的分析に加え、岸本の最近の否定辞および繫辞に関する統語的研究、多田の統語論と意味論のインターフェイスに関する知見により、状態述語に関する体系的で包括的な研究を目指すものである。

2. 研究の目的

現代日本語の状態性述語を形態・統語・意味の側面から多角的かつ有機的に分析し、動詞研究に比して研究の少ない領域を開拓することによって、言語学に新たな知見と課題を提供する。具体的には次の 4 点について、連携研究者である岸本 秀樹(神戸大学)と多田 浩章(福岡大学)と共に集中的に研究を遂行する。

(1) 形容詞類の形態的实现について、九州方言、関西方言、東北方言などの現代日本語諸方言、上代・中古日本語、朝鮮語との比較を行い、通言語的に分析する。

(2) 日本語(および朝鮮語)の繫辞(コピュラ)の形態を同定し、その実現に関する統語的・意味的分析を行う。

(3) 相・法・否定の生起に関する統語的分析を精緻化し、また、状態性との相関についての意味的観点から分析する。

(4) 状態性述語の恒常的属性記述と一時的状態記述の相違についての形態統語的・意味的分析を行う。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」で挙げた4点を研究者それぞれあるいは共同で集中的に研究し、最終年度に総括した。

具体的には、それぞれの文献収集と研究に基づき、連携研究者との共同研究およびワークショップを開催した。

4. 研究成果

それぞれの研究者が「5. 主な発表論文等」に挙げた論文・発表・著書をまとめた。

また、共同研究の過程および成果を2回のワークショップにおいて発表した。具体的には、日本英語学会第31回大会ワークショップ『状態性述語の形態・統語・意味をめぐって』(2013年11月9日、福岡大学)および『状態性述語の形態・統語・意味をめぐる諸問題ワークショップ』(2014年9月8日、大阪大学(豊中キャンパス))を開催、当該研究の成果を学界に還元し、一層の議論を喚起すると共に、質疑応答を通して参加者からの有益なフィードバックを得た。

特に、研究期間中、漆原は当初の背景および目的においては射程の範囲外であったオノマトペの述語化に着目、このことが現代形態論における新たな重要な枠組みである分散形態論の検証に最適であるとの着想を得た。そこで、考察を深め、2017-2021年度基盤研究(C)に「分散形態論の批判的検証：オノマトペの述語化と英語の転換に着目して」という課題名で申請、採択された(課題番号17K02816)。その際には、本研究での連携研究者である岸本 秀樹(神戸大学)、多田 浩章(福岡大学)に加え、名詞句の構造、名詞前修飾、形容詞の修飾について多くの研究業績を有する渡辺 明(東京大学)も連携研究者としての参加を要請し、快諾を得た。

そして、当該研究での成果をふまえ、日本英語学会第36回大会において、ワークショップ『形態論から見た統語論・意味論：軽動詞構文、程度表現、オノマトペ』(2018年11月24日、横浜国立大学)を企画、採択された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

URUSHIBARA, Saeko, "Grammatical Processes" in Sapir's Language(1921): From the viewpoint of contemporary morphology, 北九州市立大学国際論集、査読有、15, 2017, 113-132.

KISHIMOTO, Hideki, Valency and case

alternations in Japanese, Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond, 査読有、1, 2016, 125-154.

KISHIMOTO, Hideki, Ergativity of adjectives in Japanese, Snippets, 査読有、29, 2015, 8-9.

KISHIMOTO, Hideki, Exclamatives and nominalization in Japanese, Proceedings of the 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL9), 査読有、9, 2015, 159-170.

KISHIMOTO, Hideki, and Geert Booij, Complex negative adjectives in Japanese: The relation between syntactic and morphological constructions, Word Structure, 査読有、7.1, 2014, 55-87.

KISHIMOTO, Hideki, Verbal complex formation and negation in Japanese, Lingua, 査読有、135, 2013, 132-154.

[学会発表](計14件)

多田 浩章、外心的ラベルづけの拡大について、国立国語研究所領域指定型共同研究プロジェクト『日本語から生成文法理論へ：統語論と言語獲得』第一回ワークショップ、招待講演、2016年12月17日、国立国語研究所。

漆原 朗子、状態述語の形態統語論：助動詞「まい」・オノマトペ、北海道大学言語学講演会、招待講演、2016年9月8日、北海道大学。

岸本 秀樹、日本語動詞否定辞「ない」の文法化について、『文法化：日本語研究と類型論的研究』(NINJAL International Symposium: Grammaticalization in Japanese and across Languages)、招待講演、2015年7月3日、国立国語研究所。

多田 浩章、機能範疇の語彙範疇素性について(第2版)、『状態性述語の形態・統語・意味をめぐる諸問題ワークショップ』、2014年9月8日、大阪大学(豊中キャンパス)。

岸本 秀樹、日本語から見たコピュラ文の構造、『状態性述語の形態・統語・意味をめぐる諸問題ワークショップ』、2014年9月8日、大阪大学(豊中キャンパス)。

漆原 朗子、形容詞と推量表現、『状態性述語の形態・統語・意味をめぐる諸問題ワークショップ』、2014年9月8日、大阪大学(豊中キャンパス)。

多田 浩章、日本語における2種類の状態派生について、『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究』研究発表会、招待講演、2013年12月21日、国立国語研究所。

漆原 朗子、節およびDP内部における日本語形容詞類の形態的实现、日本英語学会第31回大会ワークショップ『状態性述語の形態・統語・意味をめぐって』、2013年11月9日、福岡大学。

岸本 秀樹、状態述語と感嘆表現、日本英語学会第 31 回大会ワークショップ『状態性述語の形態・統語・意味をめぐって』、2013 年 11 月 9 日、福岡大学。

多田 浩章、状態性と測定可能性、日本英語学会第 31 回大会ワークショップ『状態性述語の形態・統語・意味をめぐって』、2013 年 11 月 9 日、福岡大学。

KISHIMOTO, Hideki, Exclamatives and nominalization in Japanese, the 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFLL9), 2013 年 8 月 23 日, Cornell University.

漆原 朗子、A Morphosyntactic reflex of root and epistemic modals: A preliminary analysis、第 13 回福岡大学コロキウム、招待講演、2013 年 2 月 21 日、福岡大学。

URUSHIBARA, Saeko, A Morphosyntactic reflex of root and epistemic modals: Evidence from a Japanese negative future element, Linguistic Colloquium, 招待講演、2012 年 12 月 7 日、University of Hawaii at Manoa.

漆原 朗子、サピアの Drift から見た日本語動詞活用、日本エドワード・サピア協会第 27 回研究発表会、2012 年 10 月 27 日、上智大学。

〔図書〕(計 4 件)

漆原 朗子(編著)、『形態論』、朝倉書店、2016、166。

岸本 秀樹、「語彙部門」、『形態論』、朝倉書店、2016、27-57。

岸本 秀樹、「名詞 + ない」型形容詞と名詞編入、『複雑述語研究の現在』、ひつじ研究叢書第 109 巻、2013、41-65。

漆原 朗子、「証拠性の形態的実現 - 朝鮮語と日本語東北方言の過去表現の類似性について」、『言語と文化の対話』、花書院、2012、1-11。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

漆原 朗子 (URUSHIBARA, Saeko)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号 : 00264987

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

岸本 秀樹 (KISHIMOTO, Hideki)

神戸大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号 : 10234220

多田 浩章 (TADA, Hiroaki)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号 : 60258506

(4) 研究協力者
なし